

核家族化し、中にはお内仏のない家も多いでしょう。そうした中に育った子女も、よき縁が加われば、必ず宗教心が復活して来るのではないかと思うのです。誰か周りの人が手を合わせれば、釣られて自然と自分も手を合わせる、これが尊い人間性のあるらわれではないでしょうか(難しい言葉で言えば、人間は仏性(ほとけだね)を持つているという(こと)犬や猫はこういうことをしません。『徒然草』に「先達はあらまほしきものなり」と言いますように、人生よき先達を持つということは幸せなことです。

今、藤原正彦という人の書いた『国家の品格』(新潮新書)という本がベストセラーになっています。いまの日本はあまりにも国家の品格がなさ過ぎる、ぜひ国家の品格を取り戻さなければならぬ、というのです。「国家の品格がない」ということは当然国家を構成している国民の品格がないということですから。

ある中学校で生徒が先生に「なぜ人を殺してはいけないのですか?」と質問したのに対して、先生は「それは法律で禁ざられているからだ」と答えたそうです。これは言うまでもなく殺人はいけないからいけないのであって別に理由はありません。そう理解してきたのが品格ある人の態度でしょう。この先生の答えでは、法律で禁ぜられていないことなら、何をしてよいこ

とになります。たとい、たとい貧しくとも精神的に清潔な生き方をしてきたのです。それが今日どうでしょうか。この文章を書いている最中、ライブドアのホリエモンと堀江貴文社長逮捕のニュースが流れました。彼はかねがね「ひとの心

はカネで買える」とか「社会保障など不要」などと公言し、違法スレスレの経済行為で大金を手にしていました。それが遂に違法行為であったという疑いで逮捕されたのですが、我々に先祖はたとえそれが違法行為でなかったとしても、「武士は食わねど高楊枝」の格言にあるように、道徳的倫理的に恥じることのない生活に自信を持って生きてきたのです。藤原正彦さんは、こう言っています。「大正末期から昭和の初めにかけて、駐日フランス大使を務めた仏人のポール・クローデルは大東亜戦争の帰趨のはっ

きりした昭和十八年に、パリでこう言いました。「日本人は貧しい、しかし高貴だ。世界でただ一つどうしても生き残ってほしい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」と。なんと、面映ゆくなるような誉め言葉ですね。ところが三十年前の日本の高度成長期に、同じフランスのある作家が「今の世界でなくなつてほしい国はソ連と日本だ」と言ったのを、私はよう忘れません。どうしてこれだけの落差が生じたのでしょうか。私はひとえに日本人の宗教心の喪失に関わると思います。中国に「四世堂々」という言葉がありますように、一つ屋根の下におじいさんおばあさん、両親、子供、孫と四世が

水野さん仏式起工式



去る十月十一日、東中央で水野さん家の仏式起工式が行われました。寺報九十九号で皆さんにお勧めしたところ、さっそく申し込んで下さいました。よく分からない何かに怯えたり、媚びたり当てにしたりしがみついたり裏切られたり、そんなことを繰り返す人生は、もう終わりにしませんか?。どうぞ共に仏法をお聞かせ頂き、本当に確かなものに出遇つて、無碍の一道を歩ませていただきますしやう。